

## 「無常の風きたりぬれば」

河合 あや  
文

ここ2、3年の間に、関東時代の友人が相次いで亡くなりました。ひとは少し年の離れた長いつきあいの友人でした。トレイルランニングが趣味で、その仲間4人でトレイルランニング中に道に迷い、通常のコースでない山に入ってしまう、不幸にも滑落事故で命を落とされました。かなり衝撃的な出来事で、仕事で東京に行った際に、ご家族のお宅に伺い弔問いたしました。東京に向かう途中に雲取山くもとりやまの現場の近くまで行って花を手向けたのが忘れられません。

もうひとかたも、たまたま先ほどの方と同じ年代の方ですが、ここ数年の友人で、江戸川の堤防沿いを散歩する犬仲間でした。江戸川の犬仲間は10組前後いて、その中でもそのご夫婦とうちの夫婦で、よく食事をする親しい仲となっていました。その奥さんの方が、癌で命を落とされました。ご病気のことは周囲に話しておられず、犬仲間一同驚きでした。自分の友人が亡くなるような年代になってきたのかもしれませんが、どの方の訃報も若い年齢で、突然でしたので、やはり衝撃的でした。関東からこちらに戻ってきた自分にとって、これらの友人は、距離は離れていてもその存在を疑うこともない中で、なかなかその事実を受け止められません。突然の別れに、混乱し戸惑います。今でもときどき夢の中に出てきて、あれやっぱり生きてたんだと思った瞬間に目が覚めます。不思議と携帯の中の連絡先も消せません。

家族とは違いますが、自分の中での大きな存在に、もう二度と会えないという時、まさに「無常の風きたりぬれば」です。

この方々は、自分にとって大きな影響を与えてくれた方々で、今でも、そのひととなり、自分の心の中に生き続けます。早すぎる死に直面したとき、いのちの意味をつい問い返してしまいましたが、それも仏法の原点でありましょう。誰かの心の中で生き続ける存在、自分にとっての仏縁であり、日常に埋没する中で、立ち止まる瞬間となります。そういった自分にとって印象深い出来事が、問い返す出来事が常にあるとは限りませんが、めまぐるしい日々の中で、一秒でも立ち止まって、立ち還る。そのきっかけがお念仏であり、聞法であり、一瞬目に留まる法語であったり。それは人によって様々。日常の迷いの中、差し込む一条の光となりえます。埋没から、顔をあげて仰ぎ見る一瞬のきっかけを持ち続けることが肝要かと思います。